
闇は月の輝きに惹かれ

笙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇は月の輝きに惹かれ

【Nコード】

N8628W

【作者名】

笙

【あらすじ】

意図せずして、その身に悪魔を宿してしまった少女。禁忌とされるその存在に周囲からは冷たい態度を取られる中で、彼女はひとつの目的のために魔術を学業とする学園に暮らしていた。変わるはずの、変えられるはずの無かった日常は、金の髪をもつ少年の登場により、めまぐるしく変わっていく…。

ブログ（前書き）

更新は不定期だと思いますが、読みに足を運んで頂けたら嬉しいです。

まだまだつたない文章ですが、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ

外は満月。

清冽な月光は冷たい夜の風と共に流れ、静まりかえる夜の街を照らす。透き通るような透明感は儚げながらも穏やかに夜の景色の一角を為していた。

その街の片隅。そこには人に忘れ去られてしまったかのような古びた洋館がある。

建てられた当時、最先端の意匠を凝らして作られたのだろう。堂々とした煉瓦造りの建物は、今もなお、その威厳を失うことはない。だが、もう何十年も昔に住む者を喪^{つひ}つてしまったその住居は、もはやそこに鎮座するだけの飾りでしかなかった。

…そう、その夜までは。

その部屋に広がるのは惨状だった。

破碎した窓。外から流れ込む外気に、蜘蛛の巣が張られたカーテンが揺れる。

床に散らばったガラス片。厚く積もった埃に混じり、月光を受けて仄かに輝く。

紅い斑点。それは、燃えさかる炎よりも紅い…人間の鮮^{ヒト}血。

床に倒れ込んでピクリとも動かないいくつかの影。その大きさと形から、それが人であることは容易に想像できる。顔は陰になって

いて見えず、床に横たわる軀カラダの下から染み出る紅い液体が、徐々に広がっていく。

ピチャリ……

床を浸食していく液体が、粘着質な音を立てた。闇の中でも白く映える細い指。床の上に投げ出され、小刻みに震えるそれが液体に波紋を作り出す。

その場で少女が震えていた。自分の指が血だまりの中に浸っているという事実にも気づいているかどうか……。床に倒れ込んでいるひとつの影の傍らに、力をなくしたかのように座り込んでいる。

萎縮しきってしまった小さな身体。薄く開かれた唇からもれるかすかな呼吸音。闇夜を吸い込んだかのような黒くつややかな長い髪のが先が、その主の押さえ切れぬ震えを過敏に表し床とこすれて音をたてた。瞬くことを忘れたかのような双眸からは、髪と同じく漆黒の瞳が覗く。

濡れたように光る黒曜石の瞳は、一点を凝視したまま止まっていた。

『我を喚んだのは、そなたか？』

低い鐘をうち鳴らしたような声音が空気を震わせる。

部屋の片隅。風は通らず、空気は澱み、月の光さえ届かない、最も暗くて冷たい場所。そこに、言い喻えようがない“何か”がいた。明確な形を持たず、それでも尚、圧倒的な存在感を放って止まない何か。

『否、違うな。身の程をわきまえない無礼者の仕業だろう。…あるいはそなたが行っていれば、このような事態にはなっておらぬだろうに』

くつり、と響く哄笑。

低い笑い声がひとしきり静かな部屋に木霊する。床に倒れ伏す人影と、未だに浸食を続けている血だまりを前にして、それは異様な光景だった。

一人、それを見つめる少女は何も応えない。…応えることができない。今、彼女が目の前に行っているのは、決してまみえることはあつてはいけないと教え諭され続けた、異質の存在であつたから。

「お帰り、下さい…」

それでも、少女は震える掠れ声を絞り出す。震えを隠すかのように握りしめられた手の甲が、色を失ってますます白さを増した。

「長い眠りを、一時の出来心の為に妨げましたことは、深くお詫び申し上げます。こちらに引き留めるつもりはございません。どうぞ、お引き取りを…」

『ふむ、己の力量も礼儀も心得ている、と。なるほどおもしろい。確かに安穩の眠りを妨げられたのは不服だが、そなたのような人の子を見られたのなら、それなりの価値もあつただらう』

比較的、穏やかな返答に少女はほっとした様子をみせた。

確信が在るわけではなかったが、目の前の相手の正体を推測することは簡単だった。なにしろ、噂には事欠かない存在だ。なにかちよつとでも不審な点がある出来事が在れば、全てはこれらのもののせいだと結論づけられる。

真偽がどう、という話ではない。それが本当であれ、間違いであれ、そうたいした問題ではないのだ。

ただ、伝説の存在であると言われながらも、人の話に昇ることの絶えない程に、浸透しているというモノであるというだけ。

『だが、このまま立ち去るといふ訳にもいかぬよ』

ーピーシリーー

何かがひび割れるような音が聞こえた。

もちろん幻聴だ。今、この場にはひび割れるような物などありはしない。窓ガラスは全部割れてしまっているし、何も衝撃を与えてなどいないのだから、他の物もあり得ない。

だからこれは少女だけに聞こえた音。彼女を覆い、守っている心の障壁にひびが入った音だ。

『人界の事情に通じている訳ではないが、我のような悪魔^モを喚ぶといふことは禁忌^{タブイ}とされていたはずだろう？』

おもしろがるような口調ではあるが、その声音はどこまでも冷たい。どこに目がどこにあるかも分からないのに、突き刺さるような視線が自分に向けられているのが分かった。

『そなたの咎ではないのだろう。しかしそなたはおもしろい。そこらに転がっている者どもは使い物にもならぬ。ならば、代償を払う者がそなたであっても問題なかるう』

呼吸が止まる。体の組織全体の働きが止まったようだった。手足の末端が急激に冷えていく。

霧がかかったかのように視界がかすみ、指先に触れているはずの血の感触も感じない。感覚が全て麻痺してしまったかのような中で、耳だけがまともに音を捉えていた。

『名を』

抵抗できない…、本能でそう感じさせるような声だった。その言葉が頭に浸透していくよりも早く、相手は言葉を重ねてくる。

『我が人界^{こゝ}に留まるための契約を。そなたの名を以て、我はそのための権利を得る』

首を振ろうとした。嫌だ、無理だと声を上げようとした。…だが、それら全てが叶わぬことだった。

さらり、と髪が風を受けてなびく。床とこすれて音を立てた。そんな微かな音でさえ、聞こえてしまう今の状況が腹立たしい。

『数百年ぶりの人界だ。…まさかこの愉^{たの}しみを奪おうなどという、野暮な真似を…するわけではないだろう？』

だめ押しの一言だった。

何もするまいという本心とは裏腹に、口はまるで強要されるかのように勝手に己の名を告げる。

「コ…ト…ハ……」

『コトハだな。…しかと聞いた』

風が吹き荒れた。

二度目のとてつもない衝撃に、とつくに限界をむかえている建物はきしんで悲鳴を上げる。

そう、二度目だった。自然の風ではない、密度の濃い魔力の風が、部屋の中を縦横無尽に駆けめぐるのは。

一度目は爆発するように外側に向けて。鋭さを伴ったその風は、部屋の中身を破壊し尽くし、そして今この部屋に横たわる何人もの犠牲者を生み出した。

二度目は収束するように内側に向けて。部屋の中を渦を巻くように駆けめぐったその風は、最終的に座り込んだままの少女の元へと迫る。

『我が名はラシュファ。主、コトハの名においてここに契約を』

風の塊がぶつかる直前。意識を失う少し前に、コトハは悪魔の囁きを聞いた。

闇と静寂が支配していた一夜。そこに声にならないような絶叫が響き渡る。

異変に気が付いた付近の住人が駆けつけるまでに、そこからしばしの間を要した。

何度も衝撃にさらされて、立て付けが悪くなってしまった扉を、蹴破るように入ってきた人々は、目の前にした惨状を目撃して言葉を失うことになる。

そこには倒れ込む人影が五つ。そのうちの三つはすでに絶命し、その体から流れ出た血が床一面を真っ赤に染めていた。

また一命こそとりとめたものの、その身に決して消えることのない傷跡を刻み、そして大切な物をいくつか失った者が一人。

そして最後。

そのような状況の中で、奇跡的にほとんど傷もなく生き延びたその一人の少女はしかし、この日を境にその世界を一変させる。

全ては、その身に契約した悪魔のために……………。

第一話

晴れ渡った空から、青白い稲妻が虚空を裂いて地面に突き刺さる。鼓膜を破るかのような轟音と共に、稲妻は地面を焦土と変えた。

「行っけえ、イズチ！負けんじゃねえぞ！」

「ユート君、頑張れ！」

「二人ともいいぞー！！」

そんな中に、少年少女の応援の声が混じる。その視線の先には、今行われている授業の中で実技を行っている二人の人影。彼らの名と一緒に引き出されたその言葉達は、次なる稲妻の音にかき消された。

衝撃で舞った土砂の中から、人影がひとつ転がり出てくる。

小柄な少年だ。動きやすさを重視した服装も相まって、俊敏そうな印象を見る人に与える。だが、今はその服も、土によって少々薄汚れてしまっていた。

一方で、失われない輝きがある。キュツと引き結ばれた口元の上で、濃紺の瞳が真っ直ぐに前を見据えた。

二、三度地面を転がって、稲妻の影響の範囲内から抜け出したその少年は、すぐさま体勢を立て直して片膝をつくと、片手を未だ舞い飛ぶ土砂に伸ばして素早く何かの形を描いた。

「れきじ礫土”！」

宙に描かれた模様が光を放ち、少年が発した言葉が一時その場を支配する。その途端、重力に従って地面に落下していた土砂はその

動きを止めた。

それらは次の瞬間には、自然にあるまじき動きを始めた。細かな石や砂が集まって拳大の大きさになる。

数十を数えるその塊を確かめた少年は、伸ばした腕を横なぎに振る。それに応じるように、土の塊が一斉に一カ所に向かって放たれた。

向かう先には、一人立つ人の姿がある。

「“雷撃”！」

一見、無防備に見えたその人影だったが、その対応は早かった。先ほどの少年と同じように、宙に描いた模様の光と鋭い叫びと共に、何もないところからいくつもの雷電が生まれる。何よりも速いと言われる光の輝きは、瞬く間に土塊を砕いた。

「やりいつつ!!」

「つつ! まだまだ!!」

歓声をあげた人影もまた、少年だった。

まず目にとまるのは赤い髪。次に赤銅色の肌に、半袖から覗く腕に走るいくつかの傷跡と、野性味を感じさせるのには十分な出で立ちだ。

今も、自身が生み出した結果に満足しているのか、顔いっぱいには笑みを浮かべ、片手で拳を握っている。

一方、それとは対照的に悔しそうに唇を噛む少年は、両手を重ねるようにして地面につけた。

「正統なる契りによってその名を紡ぐ……」
「うげ! まじかよつ!!」

浮かんでいた喜びの表情もつかの間、それは相手の少年がつぶやきだした言葉によって、瞬く間に焦りの表情へと変わる。

回避のために地面を蹴った足下で、地面が不穩に揺らいた。

「……今、我に応えて力を奮え、岩巨人^{ゴレム}」

呪文^{スベル}が終詞を紡ぎ終える。地響きと共に地面が隆起し、天を突くような影が立ち上がった。

人の背丈の何倍もあるかという巨体。人間のような形をした造形だが、腕一本をとったにしても人一人が腕を回しきれないほどに太い。それら全てが岩や土、砂で構成されていた。

「おいおいユート、何時の間にこんな大技身につけたんだよ？」

「つい最近。といっても、まだ未完成だけどね。今日が初のお披露目さ。光栄に思いなよ？」

冷や汗を浮かべて尋ねる赤い髪の少年イズチに、もう一方の少年ユートが応えた。息を切らせながらも、ゆっくりと立ち上がり、遠くに離れて立つ宿敵^{ライバル}と目を合わせる。

「行け！」

召喚者の命令と共に、岩巨人^{ゴレム}が最初の一步を踏みだす。それだけで、地面が震えた。

その踏み出しは一見順調そうに見えたが、そう言うわけでもなく、一歩を進める毎に魔力がつかないでいらなくなった土がボロボロと崩れ落ちてくる。汗を大量に浮かべているユートの様子を見る限り、これが限界のようだ。それでも、唇をかみしめて意識を集中させるように目を閉じると、単調だった岩人形^{ゴレム}の動きに変化が現れた。

空気を引きちぎるような音を立てて、巨大な腕が振るわれる。外見に似合わぬ動きの速さに、イズチは地面を転がって逃れるほか無い。それでも、すぐに空中に魔法陣を描いて反撃しようとする姿勢は流石だといえた。

だが、敵わない。

もともとその性質上、雷系統の魔法を得意とするイズチと土系統の魔法を主に使うユートとでは、ユートの方に分がある。先ほど、イズチがユートの土塊を砕くことが出来たのは、ひとえに威力に置いてイズチが勝っていたというだけだ。

だが、岩巨人^{ゴレム}のように魔法による生成物の使役は、難度においてもかなり高い。細やかな技術が必要な上に、そこに込められる魔力の量が多くなるのだから、うち砕くために要する威力は、ただの土塊の時の比ではないのだ。

だから、イズチは単純に考えた。

「だったらこっちも威力を上げればいいんだろ！」

持ち前の身体能力をフルに活用して、イズチは時間を稼ぐための距離をとる。

瞬間的な速さはあっても、基本的に鈍重な巨人だ。近くにさえ居なければ、少々の余裕は出来る。

その動きによって、イズチの意図を早々に悟ったユートは眉間に皺^{ゴレム}を寄せ、岩巨人^{ゴレム}の操作に意識を集中させる。イズチのもとに進む岩巨人^{ゴレム}の歩みがだんだんと速くなり、最終的には大きな巨体が走り出す。

「疾きもの 翔けるもの 一筋の光は宙^{そら}を割り 交わる事なき天地をつなぐ

閃く輝きは闇を裂き 全てを照らす創始^{はじまり}となれ！」

イズチが空中に魔法陣を描きながら詠唱する。喚び出すのは彼にとって最大の魔法。いつも魔法陣だけで用を済ます彼が、詠唱までも使って編み出す切り札的魔法。

「粉碎しろ、岩巨人！」
ゴレム

「迅雷」
じんらい

ユートとイズチの声が重なり、岩巨人ゴレムの繰り出した愚直なまでに真つ直ぐなパンチと、イズチの渾身の魔力ちからが込められた雷がまともに衝突する。

強烈な閃光が目を灼いた。ほぼ同時に轟音が響き渡る。二人の実技の様子を黙って傍観していた教官は、慌てて自ら障壁を作り出し自分と背後に控える生徒達を守る。その光景を見ていた生徒全員が目をつぶり、両手で耳を塞いでしゃがみ込んだ。

瞬間的に失った視力と聴力が回復し始め、生徒達はおそろおそろ閉じていた瞼を上げる。

岩巨人ゴレムはまだ立っていた。その巨体を挟むようにして、イズチとユートが地面に膝をついている。両者共に息は荒く、もう立ち上がる余裕もなさそうだ。

その様子を見て、誰もがこの戦いの終わりを感じ取る。張りつめていた空気がほっと緩んだ。

この勝負はユートの勝ち。どちらも魔力は枯渇状態なのだから、この場に自分の使役物を残したユートの方に軍配が上がる。ユートが自身の魔法を解除し、岩巨人ゴレムは元のように土に帰る。だれもが二人の激闘をねぎらい、それで終わりになるはずだった。

明るい声をかけながら、クラスメイト達が二人に駆け寄ろうとした時。不吉な音が耳に届いた。

音のする方に誰もが顔を向ける。そこで見たのは土による生成物の崩壊の始まりだった。

ユートの魔力が保たなかった。

岩巨人^{ゴーレム}は魔力によって土が形を為した物だ。だから、それが元に戻るには込められた魔力が無くなればいい。本来であれば、岩巨人^{ゴーレム}と術者の間で魔力の供給が行われているので、突然崩れることは無い。たとえ、突然供給が絶たれたとしても、岩巨人^{ゴーレム}本体内に蓄積された魔力のために、徐々に崩れていくという形をとる。

だが、今回はユートの魔力が尽きるのが速かった。イズチの雷を全て受けきる前に魔力が枯渇し、岩巨人^{ゴーレム}への魔力供給は遮断。岩巨人^{レム}本体に貯められた魔力は、直前の指令であったヘイズチの魔法への迎撃^{レム}に使われたため、残された魔力はほとんど無く。

結果、穏やかに元の状態に戻る、という過程を経ることなく、土の巨体は崩壊の一途を辿る。

「離れる!!」

どこかで避難を指示する声が上がった。

鋭い一言に、事態に対応仕切れていなかった生徒達が、金縛りからとけたかのように動き出す。一番近くにいたイズチ達も、駆け寄ったクラスメイトに支えられながら走り出した。

騒然となる場。安全を確保しようと避難する生徒達。だが、状況はそれを待つてはくれない。

見る間に、砂が大きな質量を伴って崩れ落ちてくる。災害規模もあるそれらは、無情にもひとつの人影に向かって、瞬く間に近づいていく。

「「危ない!!!」」

空気を裂いて響いた声に、初めてその人影が顔を上げた。

肩をかすめる程度の黒髪。感情を宿さぬままの黒曜石の瞳をもった少女は、己に向かつてくる大量の土砂を目前にして…………。

「きえて消滅」」

一言、つぶやいた。

膨れあがる魔力の気配。唐突に立ち上がった巨大な力はしかし、一瞬で消失する。そしてそれと共に、一面を埋め尽くすかと思われた土砂の全ては、跡形もなく消えていた。

沈黙が舞い降りた。

誰もが賞賛するような激闘を繰り広げていた二人の少年、彼らを指導する教官でさえ、その見事な手腕に呆然と立ちつくしている。それほどまでに、いま目の前で起きた一連の出来事は、唐突で、意外で……そして衝撃的だった。

誰もが声を出せず、ともすれば呼吸音をたてることさえためらうような空気がその場を満たす。助けとなったのは、授業終了を告げる鐘の音だった。

聞き慣れた、いつもと変わらぬその音に、我に返った教官が生徒全員を集め始める。ぎこちなくその指示に皆が従う中、何事もなかったように平然とした様子で、一番最後に近づいてきた生徒に向かって、教官は他の生徒に気づかれないうようにそっと声をかけた。

「汐月コトハ。大丈夫か？」

「問題ありません」

「そうか」

短い応答。それがそれ以上続くことはなかった。

彼女との会話の代わりに、教官がしたのは、困惑している生徒達の意識を、別の方向に変えることだった。

「今日はこれで終わりにする。最後の二人の模擬戦だが、ありゃ、引き分けだな」

「えええっ！そりゃ、無いでしょ、教官！実力ふそーおーな魔法を使った時点で、ユートの負けじゃないんですかあ？」

「…その未完成な岩巨人^{ゴレム}でさえ、うち崩せなかったお前が勝てる要素もないだろ」

「なんだとお！？」

「はいはい、そこまでだ。反省点は自分らで分かってるだろ？俺が言うまでもないな。次、期待してるぞ」

教官の意図は、イズチの協力（といっても本人に自覚はないだろうが）によって、おおむね達成された。生徒のほとんどは、今起こった出来事よりそれより少し前の模擬戦のほうに意識が傾く。

それを感じ取ると即座に、教官は授業の終了を告げた。今日の授業がこれまでであったことも幸いして、それ以上のしこりを残すこともなく、生徒達は親しくする者同士固まると会話を弾ませながら、校舎へと足を向ける。

そんな中。

緊張がほどけた生徒達の笑い声が周囲に広がっても、

それでも、黒髪の少女は一人だった。

+ + +

「あの子…」

壁一面をガラスで仕切る、とある部屋。校舎の一部に属するところだが、視覚誤認の魔法によって外からは壁の一部にしか見えないようになっている。そこからは、先ほどの野外演習場も含まれる、外の景色が伺えた。

窓ガラスに片手を当てて、かすかなつぶやきをもらした少年は食い入るように外を見つめる。外、正確に言えばそこにいる一人の少女を。

「何か、良い物でも見られたかしら？」

背後から聞こえてきた声に我に返った少年は、内心の動揺を悟られぬように、ゆっくりと振り返る。そこには、柔らかな笑みをたたえたスーツ姿の女性が、小脇にいくつかの書類を抱えて立っていた。

「今の時間なら、二年 クラスの魔法実技の授業だったかしら。丁度貴方のクラスになるわね」

「…そうですか。いえ、なかなかにすごい人たちがいるものだと思いますして…」

「ええ、そうね。今年度の子達は確かに優秀だという話よ。…もちろん、貴方も」

本当のことは口にせず、無難な受け答えをする少年に、その女性は相変わらずの柔らかな笑みを浮かべたまま、空いた片手を差し出してきた。

「貴方が、編入生の穂純^{ほすみ}シュン君ね。私は、戸崎ナズサ。二年 クラス、ひいては貴方の担任教師になります。よろしくね」
「穂純シュンです。よろしくお願いします」

差し出された手をためらうことなく握り返す。お互いに軽く視線を合わせて手を離すと、ナズサ教師はヒールで軽く音を立てながらシュンに背を向けた。

「簡単に校舎内設備の説明をしてから、教室の方に案内するわね。ついてきて」

その後ろに続こうとして、シュンはもう一度後ろを振り返る。そこから見える野外演習場に、もう人影はなかった。けれど、瞼の裏には先ほど目にした光景がしっかりと浮かぶ。

一瞬で土砂の全てを消し去ったその鮮やかな魔法と、それを無感動なままに為し遂げた黒目黒髪の少女の姿が。

「やっと、会えた…」

最後に小さなつぶやきだけを残して、シュンはナズサ教師の後を追いかける。

人の気配を感じなくなった照明は、そのうちにそつとその灯りを落とした。

第二話

朝、まだ早い時刻だった。

日も昇りきっていないような時刻、早起きで知られる小鳥たちのさえずりさえも聞こえてこない。薄暗い中には朝霧がたなびき、張りつめたような冷たい空気にはき出した息は白く濁った。

静かな中に、足音が響く。残った仕事の消化のために朝早く来る教師も、自学に励む真面目な生徒もなく、ひっそりとした校舎の中を、コトハはひとり、歩いていた。

「いや、ひとり」ではない。

『ふむ、人気がないというのは、なにか物足りないものだな』

耳の奥、というよりは頭の中に直接語りかけてくるような声があった。

男声とも女声とも判別のつけがたい低い姿無き声。明らかにコトハに向かって語りかけるその声は、彼女以外に聞こえる者はない。

『やはり、数ある人間の言動を眺めている方が興味深い』

「そう。どうせまた来るんだから、その時にじっくりと楽しみなさい」

声の主に対してだろう、驚いた様子もなくそれだけを返して、コトハは歩き続ける。

そんな彼女の背後に、付き従うかのような気配が唐突に立ち上がった。小柄なコトハより大分大きさを感じさせる、けれど姿形を現

すことのないその気配は、彼女に向かって再度語りかける。

『して、主。^{あるじ}なぜこのような早朝に、学校^{いっ}に訪れたのだ？常ならば、今よりも大分後だろうに』

「…今日は随分と饒舌ね。普段は、ほとんど話しかけてなんて来ないのに」

『それは、主が答えぬからだろう？答えぬ相手に話しかけ続けるほど、我とて不毛なことはせぬ』

やや不満が混じるその声にコトハはため息で応じた。このように不満を言われることは多々ある。けれど、その内容は呆れるほどに単純だった。最初の内はいらだちを感じ、反発もしていたものの今はため息ひとつで受け流せる。………それほどまでに時間^{とき}が流れたということなのだろうか。

『して、何事があったのだ？』

少し感慨にふけっていると、せかすように声が再び尋ねてきた。答えなければ、何度でも尋ねてくることは分かり切っている。

進んで答えないような内容でもなかったが、仕方がないので答えることにした。もともとこれから赴く場所だ。分かるのが早いかわいかなの違いでしかない。

「理事長室よ。呼び出しがあったから」

告げた途端、周囲の空気が重みを増した気がした。当然、質量的に空気が重くなったわけではない。これは、傍らにいるものがその機嫌を悪くしたことに起因する。

『あの者か』

「…ええ、多分ね。貴方も見たことはあるはずよ。もっとも、覚えていたとは意外だったけれど」

『あれは気に入らぬ。理由など、それだけで十分であろう』

不機嫌さを如実に物語る声を、コトハは少し意外に思う。

この声の主が興味を示すのは、周囲に広がる世界にであって、人個人ではない。人というのは世界を構成する一部分でしかなく、それらによって姿を変えていく世界を愉しんでいるだけなのだろうと。だから、特定の人物一人を記憶の中に留め続けているはずもないと思っていたのだが。

『呼び出し、と言いおったな？』

「…そうよ」

『何故にそれに従わねばならぬのだ？』

「人間には人間の理由があるの。貴方は興味ないだろうけどね」
『ほう……』

声が一段低くなった。心なしかその中に冷たさが混じる。

背筋を氷塊が滑り落ちていくような感触が伝う。背後から感じた怒気とも言えるような気配に、コトハの歩みが若干鈍った。完全に止まってしまわなかったのは、いつそ賞賛に値するかもしれない。

威圧感を発して止まない声は続ける。

『我が何も知らないとても？』

「……さあ？何も言わないのに胸の内なんて分かるわけもないですよ」

『「言わぬ」ことと「知らぬ」ことは必ずしも等しいとは限らぬ。幼子でも分かることを、聡明な主が分からぬわけでもあるまいよ』

返す言葉がのどの奥で詰まる。下手に反論することは、自分の首を絞めることになるだろう。なにせ、そう言っただけなら、生きてきた年月は自分より相手の方が遙かに長い。

『主があの方に従わねばならぬ理由を取り除いても良いのだぞ？いや、むしろその方が良いかもしれぬ。心配はいらぬぞ？私の力なら一瞬にして……』

「ラシュファ」

短く名を呼ぶ。小さいながらも、はつきりと。

途端、あれだけ滑らかに発せられていた声がやんだ。…いや、やめさせた。コトハが紡いだその名によって。

「貴方の主は私だと、他ならぬ貴方が言ったはずよ」

歩みは自然と止まっていた。他のことに気を回している余裕はない。言葉に意志を、力を乗せなければ、この声の主ーラシュファという名を持つ悪魔に従えることは敵わない。

「私が主である以上、意に添わぬことをさせるつもりはないわ。下手なことはやめなさい」

静かに告げる。背後から返答は無かった。ただ、言葉の裏の意図を探るような気配をこちらに向けてくる。

視線こそ向けなかったものの、コトハは意識的に背筋に力を込めて真っ直ぐに立つように心がけた。それが答えだという意志を伝えるために。

無言のまましばらく続いた応酬は、ラシュファによって終わりを迎えた。

『仕方があるまい。ここは主に免じて許すしよう。……あの者も運がいいことよの』

フツと緊張が緩むのが分かった。それを態度に出さないようにするのに苦勞する。

力が抜けそうになる足を叱咤して再び歩き始めながら、コトハは何ともないような様子を装った。

「かもしれないわね」

『だが、思い違えるでないぞ、主』

再び、ラシユファの語調が変わる。

そこには当初のような軽薄さも、先ほどのような圧迫感も感じさせることはない。ただ、淡々と紡がれる言葉達は、感情の外に存在するような思いの強さだけを平坦に伝えてくるだけだった。

『我は目的があつて此処におる。それが妨げられるようなことがあつた場合、我は我の力を奮うことに誰の許可も得ることはない。あなたが持っている主としての権限は、半分しかないと言つことを、忘れることはないように』

それだけを言い残して、背後にあつた気配は消えた。

時を同じくして、コトハは再び立ち止まる。だがそれは、ラシユファが言つた言葉によつてという訳ではない。ただ目前に目指す扉が現れたというだけだ。

その重々しい扉にためらうことなく手を伸ばし、指先が取つ手に触れる。刹那、その動きがはたと止まる。心の揺れをそのまま現したかのように、その手が行き場を探してさまよう。

「……忘れた事は、一瞬だつてないわよ……」

誰の耳にも届かないような小さなつぶやき。いやそれとも、姿を現さずしても常に彼女の側を離れることのない、悪魔^{かれ}は聞いていただろうか。

切なさで揺れる瞳が伏せられたのは一瞬。次に彼女が顔を上げた時には、そこには切なさどころか、他の何の感情も見られなかった。

己の感情を完全に制御し、他の誰にも悟られないように心の奥深くに押しやって、コトハは目の前のドアの扉をノックした。

+ + +

ノックの音が聞こえてきたとき、その男は奥に据えられた机の前に腰掛けて、何らかの書類に目を通していた。

灰白の髪を短く切りそろえ、同色のスーツを一分の隙もなく着こなしている。世に知れ渡った名声と、その中で積み上げてきた実績に相当する年数を考えてみると、もう相当な年であることには間違いないのだが、そのような様子は少しも見られない。

世根崎^{よねざき}ヒイチ。世界屈指の魔術師であることで知られ、この学校の設立者、および理事長を務めている男だ。

「入りなさい」

「…失礼します」

書類から目も上げずにそう言うと、小さな声がドアの向こう側から返ってきた。重々しい音を立てて、ドアがゆっくりと開かれる。人が入ってくる気配と、ドアが完全に閉まったのを感じ取って初めて、世根崎は顔を上げた。

「お呼びだそうですが」

「ああ、そうだったね。…座るかい？」

「結構です」

「そうか」

申し出をすげなくあしらわれても、彼は顔色ひとつ変えなかった。それどころか、手にしていた書類を完全に机の上に放り出し、口元に笑みを浮かべてもいる。

椅子から立ち上がって、先ほど指し示したソファに自分だけ腰掛けると、前に置かれたテーブルの片隅に手を置いた。それに反応するように、その下に魔法陣が浮かび上がる。

その陣をなぞるように薄く光がはしると、その上に湯気をあげるカップがひとつ、出来上がっていた。中身は紅茶。受け皿付き。ご丁寧にもその脇にはお代わり用のポットまで準備されている。

ソファに深く腰掛けて、紅茶に口をつけ、ゆっくりと楽しむように飲んでから、世根崎はそれまで一言も言わず、それどころか身じろぎもしないで待っていたコトハに再び声をかけた。

「昨日の件は、聞いたよ。災難だったね」

「…お気遣い、痛み入ります」

「君がその場に来てくれて助かったよ。あれだけのことが、たいした被害もなくて済んだのは、ひとえに君の功績が大きい。実際、その場にいた教官は何もせずに関わったという事だったらしいからね。君はそこらへんの魔術師よりも腕がいい」

多忙でほとんど学内に居ることは少ないといっても、その中で起こったことで、彼の耳から逃れることは出来ないということだろう。少しも漏れることなく、その詳細は知られていると言って良かった。

カップを手の中で回し、その揺れる液面を見つめながら、おもし
るがるような口調で語るその内容は、
本気なのか冗談で言っているのかいまいち判別がつけがたい。

「ご用件はそれだけでしょうか？」

「そう聞いてくるってことは、そうじゃないと思っているってこと
だろう？」

先ほど言われていたことについては何も触れず、それだけを返し
てきたコトハに、世根崎は笑みを含んだ言葉で言った。返ってくる
のは沈黙。つまりは肯定だ。

「報告の教官から、疑問の声が上がっているよ」

唐突に本題を告げてみる。それを聞いていたコトハは何も答えな
かった。それでも、その体が強張って揺れるのを、世根崎は目の端
で捉えていた。

「学内で使うのは控えたまえと言ってはいたが……。今回のような場
合は仕方があるまい。可愛い生徒達が怪我するのは望むことでは
ないからね」

あえて気づかない振りをして、それでも用件を告げるのをやめた
りはしない。

直視はしないまでも、視界の隅に常に彼女を収めつつ、世根崎は
まるで独り言のように続ける。

「だが、改めて言っておこう。君の持っている力は、秘されてしか
るべきものだ。そして、とっておきの切り札ともなりうる、ね」

紅茶を一口、口に含む。お気に入りの香りが鼻腔を通り抜けていった。

「だから私は君をここにおいているし、それを使いこなしてもらうための教育を受けてもらっている。ただ、それが周囲に大きく広まるのは、少々頂けないからね。これまで通り……」

「心得ています」

「…ああ、そうだね。君は本当に良くやってくれているよ。予想以上と言ってもいい。確かに何度も繰り返すのは、野暮だったかな」

琥珀色の液面に映る自分の顔に、一度微笑みかけてから、一気に中身を飲み干す。空のカップを受け皿に戻してから、世根崎はようやく此方を見てくる少女に顔を向けた。

奥の^{すべ}見えない黒曜の瞳。この年でありながら、彼女は己の心を塞ぐ術を身につけている。

最初に、彼女を学園に招き入れたときは、そんな様子は見られなかったように思う。自分でさえ、数十年かけて得たその術をたった数年で身につけてしまった彼女には、驚きを通り越して感嘆する。

普通の人なら、そんな彼女に哀れみを覚えるものなのだろうが、あいにくと世根崎にそんな殊勝な思いは湧いてこなかった。

そうなるようにし向けたのは自分だということもあるが、それだけではない。明暗入り交じる魔法の世界の中で、生きていくのには必要なことなのだと、彼自身割り切っているし、それは目の前に立つ少女も心得ていると知っているからだ。

「朝早くから呼び出したりしてすまなかったね。もう、行っても構わないよ」

「…失礼しました」

無感動にそう言つて、コトハがクルリと背を向けた。すぐ真後ろのドアの取っ手に手をかけて、出ていこうとするその小さな背中を見ている内に、もうひとつ、脳裏に閃いたものがあつた。

「ああ、そうだ。もう一つだけ」

コトハの動きがピタリととまる。自分の言葉を聞かずに、彼女がこの場を立ち去ることはないと分かつてはいたが、世根崎は間をとるような無駄な時間は費やさなかつた。

「彼女が、起きたそうだよ」

この時間の中で、一番彼女の反応が顕著に現れた。華奢な体躯がビクリと揺れる。肩に触れる程度の黒髪が大きく揺らいだのは、きっとこちらを再び振り返ろうとしてなのだろうが、結局はそうしなかつた。

「そう、なんだ…」

ただ、吐息のような独り言を漏らして。彼女は何事もなかつたかのように、ドアの向こうへ姿を消す。扉が重々しい音を立てて、閉じた。

その姿を、世根崎は最後まで見届けなかつた。空のカップに新しい紅茶をつげたしながら、ドアの閉まる音だけを聞く。もちろん、その前の彼女のつぶやきも耳には入ってきていたが。

「ようやく、時間が動くかな」

足音が聞こえなくなった頃、世根崎がそうつぶやいた。
表情は、表舞台に立つときの穏和な笑みを浮かべたまま。瞳の奥
には、冷たい輝きを宿して。

彼が背にした窓の向こう側で、今、ようやく陽が昇った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8628w/>

闇は月の輝きに惹かれ

2011年11月20日16時07分発行